



思わぬ事故に合わないための10原則

洗剤、化粧品などのトイレタリー製品、接着剤、殺虫剤などの様々な化学製品の事故相談を受けていると、こうしていれば未然に防げたのにとすることがあります。製品の欠陥が原因で損害を被ったケースは避けようがない面がありますが、自身の使い方に問題があったり、その製品に対する知識がなかったことが原因だったり、思い込みや勘違いが原因だったりする事故は、ちょっとした注意で未然に防ぐことができます。そこで、“こうしていれば”を集めて「思わぬ事故に合わないための10原則」を作ってみました。



①『警告表示』は絶対に守ること！

製品のパッケージには、その製品を事故無く上手に使うための注意表示が記載されていますが、その中で、守らないと身体・生命の危険を伴う事故に繋がる事柄を、分かりやすく端的に、大きな字で表示したものが『警告表示』です。警告表示には事故の際の危害の大きさにより、危険、警告、注意といった言葉が使われています（危険>警告>注意の順で危害の程度が大きい）。わかりやすい実例としては、塩素系漂白剤やカビ取り剤の「まぜるな危険」表示があります。

②製品を買うとき、使うときは用途を確認する！

すべての製品はある目的を達成するための手段として使われます。したがって用途はおのずと限定されるものです。メーカーはその用途での使用を前提に製品設計を行い、安全性が保たれるようにしています。用途外使用は事故に繋がる恐れがあるだけでなく、メーカーからの補償を受けられないことがあります。インターネット等で個人が、用途外使用を裏ワザとして紹介していることがあります。事故の際に補償してくれる訳ではありません。

③使用量や使用頻度を守る！

製品によっては過剰使用や高頻度使用が事故に繋がる場合があります。製品に記載されている使用量の目安や使用頻度を守って使うようにしましょう。

④異なる製品を同時に使用しない！

異なるタイプの製品を混ぜると、思わぬ事故に繋がる場合があります。例えば、トイレ用洗剤の中には塩素系の洗剤と酸性洗剤がありますが、これらは同時に使用すると有害な塩素ガスが発生する恐れがあります。両者には「まぜるな危険」の表示があり注意喚起されていますが、そもそも異なる製品は同時に使用しないようにしていればトラブルは起こりません。

⑤詰め替え製品は正しく選ぶ！

環境負荷の観点から多くの製品で詰め替え品が販売され、広く普及しています。詰め替え品は形状が似ていることから間違えてしまうことがあり要注意です。シャンプーとコンディショナーのよ

うに、同一ブランドで用途が違うものだけでなく、用途、ブランドが異なっても色や形状が似ていることから間違えてしまうこともあります。

⑥専用容器を使う、他の容器に移し替えない！

専用容器はそれぞれの製品の品質を保つように材質や仕様が決められています。例えば、酸性やアルカリ性の洗浄剤をアルミニウム製の飲料缶に入れるとアルミニウムと反応して水素ガスが発生し容器の内圧が上がって破裂する恐れがあります。塩素系のカビ取り剤などハンドスプレー製品はそれぞれの製品の特性に合わせてスプレー部分が設計されています。専用ではないスプレー部分を使うと泡状にならず、微細な液滴が飛び散ることがあり危険です。また、製品表示を確認することができなくなるのも好ましくありません。

⑦業務用・プロ用の製品に安易に手を出さない！

ホームセンターやインターネット通販で業務用・プロ用の製品を手に入れることができます。効果が高いだろうと期待して安易に使用すると思わぬ事故に繋がる可能性があります。業務用・プロ用の製品はそれなりの専門知識があることを前提にし、使用方法を守り、場合によっては防護具の使用や使用環境の整備が必要なことがあります。

⑧インターネット通販を利用する際は製品情報、メーカーとその連絡先を確認する！

インターネット通販を利用すれば居ながらにして何でも手に入れることができます。しかし、中には素性が明らかでない製品もあり、実際に様々なトラブルが発生しています。広告文句に惑わされずに、販売サイトの画面上で、使用上の注意や安全性に関連したものなど製品情報がしっかりと掲載されていること、メーカーがきちんと表示されており、製品に関する問い合わせやもしもの際の相談の連絡先が明記されているかを確認しましょう。

⑨子どもや認知症の方に注意する！

自分は注意しても、家族が事故にあうこともあります。特に注意が必要なのは子どもと認知症の方です。子どもの場合、1歳未満の乳幼児の誤飲・誤食には特に気を付けましょう。この時期の子どもはハイハイからやがて歩き出し、活動領域が広がり、手当たり次第に何でも口にに入れてしまいます。誤飲・誤食による急性中毒は、身体の小きな子どもには、少量でも影響を受けやすくなります。

認知症の方が、色々な製品を食品と間違えて誤飲・誤食する事故が増えています。毒性は高くなくても、嘔吐した際に気管から肺に嘔吐物が入ることがあり、誤嚥性肺炎を起こして重篤化することがあります。口に入れてほしくない物は置き場所に注意しましょう。

⑩わからないことはメーカーの相談窓口聞く！

製品のパッケージには、使い方、使用上の注意など、使用に際して必要な情報や、もしもの時の対応についてはだいたい掲載されています。しかし、限られたスペースに詰め込んで書かれているため、字が小さく読みにくいものです。確認したくても読み取れず、緊急を要する事柄は、メーカーの相談窓口聞くようにするとよいでしょう。

どれも実際に起こった事故事例からの教訓です。日々の生活で活用して頂ければ幸いです。